＊･＊･＊･＊･＊･＊･＊･＊･＊･＊･＊･＊･＊･＊･＊･＊･＊･＊･＊･＊･＊･＊･＊･＊･＊･＊･＊･＊･＊･＊･＊･＊･＊･＊･＊

# ロンドン大学夏季英語音声学コースに参加して

小　松　雅　彦

2012年8月13日～24日にロンドン大学（University College London、以下UCL）で開かれた英語音声学夏季研修（Summer Course in English Phonetics、以下SCEP）に参加した。このような集中的な音声学の研修は、恐らく世界で唯一のもので、毎年、世界中から100名以上の参加者がある。

この研修を主催しているUCLの音声学研究の歴史は古い。UCLのDepartment of Phoneticsは、今からちょうど100年前、1912年にDaniel Jones

勉強に勤しんだ居室

を長として設立され、当時より現在まで、世界の音声学研究の中心であり続けている（現在は、Division of Psychology and Language Sciences のResearch Departmentの1つとなっている）。International Phonetic Association のwebページも、ここで管理している。ちなみに、電話を発明したベルもUCLの卒業生であるし、伊藤博文らの日本人もUCLで学んでいる。

SCEPは、2週間にわたる音声学の集中研修である。中心となるのは、外国語としての英語の教員、英語を専門とする学部生、大学教員・大学院生等を対象としたコース（EFL Strand）である。このコースでは、音素システム、異音、語強勢、弱化・同時調音、文強勢と意味、イントネーションと意味など、英語音声学の主要な領域をすべてカバーする。毎日のスケジュールは、50分のセッションが6つあり（講義、発音演習、講義、イントネーション演習、昼休み、リスニング演習、特別講義）、1日5時間、合計で50時間の研修となっている。講義は大教室で全参加者対象に行われ、発音演習とイントネーション演習は1クラス9名ほど、リスニング演習は34名ほどのグループで行われていた。講義と演習がうまく組み合わされており、また、シラバスが良く練られているように感じられた。

2004年以降は、IPA Exam Strandも開講されている。こちらは音声学の研究者向けで、IPA音声学技能試験（International Phonetic Association Certificate of Proficiency in the Phonetics of English）の受験を目的としたコースである。講義はEFL Strandと共通で、演習だけが異なった内容となる。IPA音声学技能試験については、成田圭市（2009）「IPA音声学技能試験について」（『新潟大学教育学部研究紀要 人文・社会科学編』1(2), 139-149）に詳しい。ただ，この試験は知名度が低く，合格しても実利的なメリットは乏しい…

今回のSCEPへの参加者登録者（参加者実数は

UCLにて

多少これより少ない）は、EFL Strandが110名で12クラス、IPA Strandが9名1クラスであった。このうち、EFL Strand 4クラス43名は、日本人学生である。本学の学生にも参加して欲しいが、レベルが高すぎる可能性大である。

筆者は、本学の英語英文学科1年次の「英語音声学演習Ⅰ・Ⅱ」を担当しているが、EFL Strandのシラバスは参考になるところが大きい。SCEPの総研修時間は50時間で、「英語音声学演習Ⅰ・Ⅱ」は年間で45時間であり、ほぼ同じである。ただ、SCEPの内容そのままではレベルが高すぎるので、本学の学生用に修正する必要がある。筆者はIPA Strandに参加したため、EFL Strandの演習内容の詳細が分からない。近いうちに、EFL Strandにも参加してみたい。

今回、筆者はIPA Strandに参加した訳だが、これほど勉強したのは久しぶりである。講義・演習やその宿題と予習・復習で精いっぱいであった。それとは別のさらに多量の自主課題は、体力不足であった。行く前はロンドン観光もなどと考えていたが、論外であった。参加するなら体力のある若いうちの方が有利である。筆者のIPA音声学技能試験の結果については、伏せておく…

*・*・*・*・*・*・*・*・*・*・*・*・*・*・*・*・*・*・*・*・*・*・*・*・*・*・*・*・*・*・*・*・*・*